

古文 物語

伊勢物語

芥川

理解を深めるために

■学習のねらい■

男と女の事情を読み取り、男の行動に伴う心情を理解する。さらに、歌に込められた思いを読み味わう。

\*

\*

\*

男女の逃避行を理解する

ある男が結婚したい女を盗み出して、暗い中逃げ出しました。

■注意する語

得<sup>う</sup> ア行下二段動詞 「手に入れる」  
よばふ 求婚する

●読解のポイント 同格の格助詞「の」前後に同じものを表す部分がある。

女<sup>に</sup>え得まじかりける (女)

え<sup>く</sup>打ち消し 不可能「く<sup>く</sup>することができない」

助動詞「まじ」 打ち消し推量

男の心遣いについて読み取る

逃げる途中、草の上の露を見て女は「あれは何ですか」と尋ねましたが、先を急ぐ男は答える余裕がありません。しかし、夜も更け天候も悪くなったので、通りかかった蔵で女を休ませ男は番をします。ところが、女を鬼が食べてしまったのです。

この女は身分の高い家柄で、家の中で大切に育てられていると考えられます。

■注意する語

率<sup>り</sup>る ワ行上一段動詞 「連れて行く」  
居<sup>ゐ</sup>る ワ行上一段動詞 「座る」



講師

畠山 俊

●読解のポイント 品詞分解

更け（カ行下二段動詞・連用形）＋に（完了の助動詞・連用形）

＋けれ（過去の助動詞・已然形）＋ば（接続助詞）

で 接続助詞 「ないで」

さへ 副助詞 「までも」

なむ 終助詞 「くしてほしい」 未然形接続

「なむ」には「な」（強意の助動詞・未然形）＋「む」（推量の助動

詞）もある。

物語の真相を知る

明るくなり、さらに逃げようと蔵を見ると女はいません。嘆いてもかいがなく、男は歌を詠みます。露のように消えてしまっていれば、別れを経験しなくても済んだのにといい気持ちを込めた歌でした。

歌では、露ははかないものとして、しばしば「命」を象徴するものとして使われます。

この話の真相は女の兄弟が女を取り戻したということになっています。

■注意する語 やうやう 「だんだんと」

●読解のポイント

問ひし 問ひ（ハ行四段動詞・連用形）＋し（過去の助動詞・連体形）

まし 「くすればよかったのに」

伊勢物語

芥川 あくたがわ

講師

畠山 俊

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行くさき多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

【第六段】

【現代語訳】

昔、男がいました。(高貴な)女性で、自分のものにするのができそうになかったのを、長年求婚し続けてきたのですが、(その女性を)やっこのことで盗み出して、とても暗い中(逃げて)きました。(その道中で)芥川という川を(女性を)連れて行ったところ、(女性は)草におりていた露を(見るなり)「あれは何ですか。」と男に尋ねました。行先はたくさんあり、夜も更けてしまったので、鬼のいるところとも知らないで、雷までもが大変ひどく鳴り、雨もひどく降ったので、荒れ果てた蔵に、女性を奥に押し込んで、男は弓とやなぐいを背負って扉の前にはいました。はやく夜も明けてほしいと思いついたところ、鬼はたちまち一口に(女性を)食べてしまいました。「あれえ。」と(女性は)言ったのですが、雷の鳴るやかましさと、(男はこれを)とても聞き取ることができませんでした。次第に夜も明けていくので、(男が蔵の中を見ると、連れてきた女性もいません。(男は)地団駄を踏むことをして泣くのですが、どうしようもありません。

「(あれは)真珠ですか、何ですか」と(あの人)が尋ねたときに、「(あれは)露だよ」と答えて、(その露が消えるように私も)死んでしまえばよかったのに。